

な知識であるといえる。狩猟¹⁾では、矢に毒を塗るなど毒性が活用され、食では、自生植物の毒性が消され食用とされる技術が発展した。医療では、毒は薬に利用された。薬草とされる植物の成分には毒性をもつものもあり、毒性は微量を用いるなど工夫することによって身体にとっての薬となったのである。毒は、決して「完全な悪」ではなく、薬と表裏一体の関係にあることは重要な点である。

人々の間で語られた毒は、チベット医学と決して無関係なものではない。むしろ、交易、狩猟、食、薬といったキーワードを通じて密接なつながりをもったものである。

毒とともに暮らすことが村では身近な生活世界であった Monpa 社会において、照葉樹

林という環境や狩猟、食、民間医療などを通じた毒を扱う知識や技術、彼らが利用する自然資源は、チベット医学に通じるものであったといえるだろう。境界に暮らす彼らの生活に寄り添うなかで、これまでとは別の視点からチベット医学像を描くことができるのではないかと考えている。

引用文献

Solanki, C. S. and Pavitra Chutia. 2004. Ethno Zoological and Socio-cultural Aspects of Monpas of Arunachal Pradesh, *Journal of Human Ecology* 15(4): 251-254.

- 1) 山奥の村に住む Monpa は狩猟を行なう。狩猟では、矢に植物性の毒が塗られるという報告がある [Solanki and Chutia 2004].

「聖地の旅」と震災

—日常世界とフィールドのあいだから—

濱谷 真理子*

「南インド聖地の旅：沈黙の聖者ラマナ・マハルシ」と銘打たれた「聖地の旅」は、「フシギ村」の人びとが 10 年前から 2 年に一度実施している恒例のツアーだ。彼らが訪れるのは、タミルナードゥ州のティルヴァンナマライというまちにある、聖者ラマナ・マハルシ (1879-1950) を祀るアーシュラム

(修行道場)。そこでは、参加者は束の間ではあるが日常を離れ、思う存分瞑想にふけったり、マハルシが暮らしていた山を散策したりと、思い思いに聖地でのひと時を過ごす。しかし、今回のツアーは、3月12日から22日までの約10日間、ちょうど東日本大震災の翌日に始まるものだった。震災の発生は、そ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の被害状況が拡大していくにつれ、ツアー参加者の心を深く動揺させ、変容させていったのである。

フシギ村の人びと

ひとまず、「フシギ村」(仮名)について説明しよう。それは、小学生の子どもから一般家庭の主婦まで、さまざまな人びとがさまざまなことを学習しに集まる、大阪にある私塾の名前である。高校・大学受験対策の勉強から、大人のための現代国語、般若心経を読む会、随筆の指導、そしてヨーガまで、学習・指導の内容は多岐にわたる。私がそこに通い出したのは、高校・大学浪人時代にそこで学び、現在は大学院でヨーガについて研究する友人が、月に一度ヨーガ・スートラという古典の勉強会を開いており、それに参加するためだった。私が研究対象とするインドの女性出家者の中には、ヨーガの知識や修行方法を身につけている人たちが少なくない。日本のヨーガ修行者について学ぶことで、フィールドと私自身の日常世界をつなげたい、そうした思いを込めて、私はフシギ村にかかわるようになっていった。

今回のツアーに参加したのは、ふだんの勉強会に集まるメンバーが主で、フシギ村を運営するM先生(60代男性)、自身ヨーガの指導者であり教室で教えているYさん(50代女性)とTさん(60代女性)、先生のもとで10年間ヨーガを学んでいる主婦のSさん(50代女性)、臨床心理士のOさん(30代男性)、そして筆者の友人A(20代男性)の6人に、ツアーに添乗する旅行代理店のD

さん(60代男性)、筆者である。M先生は、30代のときに身体を壊したのがきっかけで、学習塾を営む傍らヨーガやほぐしの技法を学び、塾を訪れる希望者にヨーガを教えるようになったそうだ。ツアーの代金は20万円超とかなり高額だが、毎回参加するM先生やAにとっては「来ると決めている」「儀式」のような旅行。そのほかの人びとも家庭や仕事の事情から行けないかもしれないと当初は逡巡しながらも、最終的に自らの熱意でもって参加を決めた様子だった。

アーシュラムでの生活

ラマナ・マハルシのアーシュラム(写真1)は、まちの中心から2キロほど郊外、標高約700メートルの聖山アルナーチャラを臨むふもとに位置する。インドのみならず日本や西欧など世界中からの信者が訪れるため、アーシュラムは昼夜問わず人でにぎわい、周囲には長期滞在の外国人が多く暮らすコミュニティのような、独特のまちの空気が形成されている。フシギ村の人びとが到着したのは3月13日、すなわち震災発生の翌々日。



写真1 アーシュラム正門(Sさん撮影)

先に待っていた私は彼らが無事に来られるだろうか心配していたが、全員関西在住で、関空発の便だったため、出国にあたって影響はなかったらしい。

アーシュラムに併設されるゲストハウスに移動し、男性4人、女性4人に分かれて宿泊。朝夕の礼拝やヴェーダ聖典の朗誦、講話、食事時間が記載されたタイム・スケジュールが一応配られたものの、アーシュラムで朝昼夕の食事をとることと、そのときに集まって簡単なミーティングをする以外は、瞑想するのまちを観光するのも買い物に行くのも基本的には自由行動だ。食事はベジタリアン食で、野菜の種類が豊富なおえあさりした味付けでとても美味しかった。食事以外で集まっていたのは、夕方に1時間半ほど行なわれる「サットサンガ」という名前の勉強会（写真2）。これは、日本で開いているヨーガ・ストラ勉強会の延長で、Aが講師としてマハルシの『不滅の意識』¹⁾というテキストを読みつつ、さまざまな問題について話し合おうというものだった。



写真2 ある日の勉強会（筆者撮影）

広がっていく震災の不安

臨床心理士のOさんが、心情を吐露したのは、「私とは何か」をテーマに議論した14日のサットサンガのときだった。航空自衛隊で勤務するOさんは、幹部候補生を相手にカウンセリングなど心のケアをする仕事をしている。震災発生後、職場をともにする自衛隊員が救出作業に向かう、そして彼らの精神的な支援が必要になるだろうという状況下で、Oさんは直前までインドに来るかどうかが悩んだらしい。ここに来るのが「自分の務め」だと妻子にも自分自身にも言い聞かせながらやってきた。それでも、飛行機の中でも「これでええんかな」とずっと苦悩していたようだ。「帰ったら津波の問題も考えなあかんけど」と、Oさんは言葉を少しずつ切り出すように話した。「バックボーンをつくりたいんですよ…生きている限り必ず苦しみはくるからね。知識をためて、バックボーンをつくりたい。」悩みがもちこまれたときに、それに対してきちんと返せるだけの「壁」となるように。それが「自分の務め」だとおもうと、Oさんは繰り返した。

不安やある種の後ろめたさを抱えていたのは、Oさんだけではない。日が経つにつれて、震災の深刻さは徐々に明らかとなっていった。アーシュラムのスタッフや信者、長期滞在する日本人、そして通りすがりの行者や地元民まで、会う人会う人が「大丈夫か」と心配して声をかけてきては、ネットでみた

1) ブラントン、ポール・ヴェンカタラミア、ムナガラ記録。2004。『不滅の意識—ラマナ・マハルシとの会話』柳田侃訳、ナチュラルスピリット。

という最新の被害状況を（今からおもうとデマも少なくなかったが）、逐次知らせてくれるという有様だったからだ。ひととき置いてきたはずの日本での現実世界は、遠く離れているにもかかわらず、いやむしろ遠く離れていて状況がわからないからこそ余計に、「自分たちだけこんな聖地にいていいのか」（Dさん）という自問を参加者の脳裏にこびりつかせるようになった。

そんな折、添乗員Dさんの配慮により、ツアー3日目に被災者供養のためのナーヤーナ・セーワー（写真3）が行なわれることになった。これは、結婚や誕生日、死者供養など行事ごとに行なう施食のことで、神の名を唱えながら寺院をめぐる行者たちを中心に、集まってくるもの乞いたちに食事を施す。この日のメニューはレモン・ライスにヨーグルト・ライス、野菜のカレー、菓子、豆のスナック、漬物。アーシュラムが用意した食料の詰まった大きな鍋やバケツの前にフシギ村の人びとが待機し、列をなして受け取りにくる行者たちに直接食事を手渡していった。50人くらいは来たのだろうか。感受性の強いYさんは、手渡ししながらぼろぼろ泣いていた。1月に急性ヘルニアを患い、病み上がりの身体をおしてやってきたYさんは、震災で心を痛めていた。

その翌々日にも、アーシュラムで被災者供養のための特別な礼拝が行なわれた。さらに、世界平和や世界の吉祥を祈願して定期的に催される護摩（写真4）や、月に一度満月のときにアルナーチャラ山の周囲を歩いてめぐりグリブラダクシナのときにも、



写真3 施食の一場面（Sさん撮影）



写真4 護摩の一場面（筆者撮影）

さまざまな人びとが日本への特別な祈りを込めてくれた。若い頃はヒッピーで、個人の旅行代理店を営む現在までおよそ40年間インドと日本をいったりきたりし続ける添乗員のDさんは、そのたびに誰よりも感銘を受けていた。

「心が重かったけど、（礼拝の）鐘の音を聞いて気が楽になりました。」

「ここにいることに意味があるんですよ、地震が起きて、アルナーチャラという祈りの届きやすい場所にいる。」（写真5）

彼自身に言い聞かせるだけでなく、ツアー



写真5 アルナーチャラ山を見上げる(M先生撮影)

参加者を元気づけるための配慮もあったのかもしれない。当初は表情の冴えなかったOさんも、「何でここに来るのかわかった気がする…ここにくることの意味がわかった」とさっぱりした笑顔で語るようになった。涙を流していたYさんも、「いろいろ困難があったけど、ここに来ることになってたんだな、とおもう」「今回来てみてね、帰ったらいろいろ整理する時間をもたなきゃな、とおもったの。被災地の人になにかしたいとおもっても、身体がこれだと何もできないしね。だから整理しないと。そう考えるようになりました」と、前を向いた。

旅を終えて

「あなたたちは、招かれてきたんです。アルナーチャラの恩寵を得て帰ることができるんですよ。招かれて、恩寵を受けて、それを分かち合うために、ここに来たんです。」

最後のサットサンガで、自分たちだけ聖地にいることに心の重みがあったと告白するDさんに、20年近く現地に居住する日本人信者の男性が語った言葉だ。震災のさなか聖地にいることの「意味」を、参加者たちは求めていた。自分や誰かに向かって意味を語りかけることは、それぞれが意味をつくり出すことでもあった。「聖地の旅」というフィクションは、震災という非日常的な現実と直面させられた人びとに、帰っていくために必要な意味を与えてくれたのではないかとおもう。フィクションは現実を生きるためにつくりかえられる。もちろん、震災を、自分たちにできることを超えていること、いわばカルマ(業)のようなものとして、冷静に瞑想や、頼ってくる患者の癒しに専念するM先生のような人もいた。特別な意味を必要とする人もいれば、ちがった形の意味を生きる人もいる。私はといえば、少しでも彼らの語りや祈りに耳を傾け、それをなんらかの形で伝えることに、意味を見出そうとしていたのかもしれない。この場を借りて少しでもそれが果せていることを、ねがう。